横浜市民によるドイツ海軍将兵の慰霊

―根岸外国人墓地墓前祭に参加して―

冨樫　勝行　陸自81

はじめに

毎年8月15日、政府主催「全国戦没者追悼式」が日本武道館で挙行されています。地方自治体等が主催する追悼式も全国約170カ所で実施されています。（総務省HP）

戦後80年を迎え、「英霊の慰霊顕彰」を各地で次世代に広く継承していくことは大きな課題ですが、2024年11月30日、横浜市仲尾台の根岸外国人墓地で開催された横浜市民によるドイツ海軍将兵の慰霊（墓前祭）に、元在ドイツ防衛駐在官の桑原和洋1陸佐らとともに参加する機会がありました。旧軍や自衛隊の関係者ではない地域の人々が担っている外国の軍人犠牲者の慰霊・顕彰行事として、全国で課題となっている今後の継承のために参考になるものと思います。

1　2024年根岸外国人墓地墓前祭

墓前祭は、在京ドイツ大使館武官室が主催し、横浜日独協会、横浜山手ライオンズクラブ、東京横浜独逸学園、地元の仲尾台中学校、立野小学校、地域住民など約120人が参列しました。1942（昭和17）年11月30日に発生した、横浜港でのドイツ軍艦爆発事故で亡くなったドイツ海軍将兵61名（その他に日本人や中国人ら41名が死亡）の犠牲者の冥福を祈る行事で、仲尾台中学校生徒による慰霊のブラスバンド演奏のもと、ドイツ大使館駐在武官ペルジケ空軍大佐はじめ参列者の献花などがありました。

2024年墓前祭参加者（写真提供：横浜日独協会）

ペルジケ大佐は「第2次世界大戦の歴史の経験をどのように次世代に伝

えていくかが課題になっている。今日この場にいろいろな世代の方が集まったことをうれしく思う」とのスピーチをしましたが、日独は先の大戦で自国以外でも多くの犠牲者を出しており、英霊の慰霊顕彰を次世代に継承していくことは難しい問題になっています。

2　横浜港でのドイツ軍艦爆発事故

(1)　事故の経緯

1942（昭和17）年1月、日独伊軍事協定が締結され、ドイツは順次10隻以上の海上封鎖突破船と呼ばれる高速輸送群を太平洋地域に投入しました。これらの海上封鎖突破船は、ドイツ本国やフランス沿岸から、日本が要請した電波兵器（レーダー、ソーナーなど）、精密機械、光学機械用のガラス及びこれらの設計開発図仕様書などを運んできたお返しに、日本占領下にある南方諸国に貯蔵されていた生ゴム、錫、タングステン及びモリブデンなどをドイツ本国に運んでいました。その後、イギリスが高性能のレーダーを開発し、大西洋を航行するドイツの突破船が夜でも撃沈されるようになるとドイツの艦船は極東地域にとどまり、日本海軍の輸送能力を補っていました。

そんな中でドイツ仮装巡洋艦第10号（トオル Tohr 号：以後ト号）が1942（昭和17）年10月、日本に到着し、11月には三菱重工業（株）横浜船渠での修理作業があり、11月30日には新港埠頭第8号岸壁に係留され、日本海軍から譲り受けた弾薬、火薬、燃料、食料及び魚雷54本などの搬入が行われていました。

また1942年11月24日、新造の高速輸送艦ウッカーマルク号（以後ウ号）（1万698トン乗組員350人）が、オランダ領バリクパパンから運んできた揮発油6000トンを川崎港に陸揚げし、11月28日には横浜新港埠頭第8号岸壁に接岸しました。11月30日、ウ号では中国人乗組員41人を使い空になった右舷油槽内を清掃していました。

6号岸壁には同年7月18日以来、ドイツ輸送船ロイテン号（以後ロ号）（7131トン、乗組員217人）が係留されていました。同船は、ト号が同年5月10日にインド洋上で拿捕したオーストラリア船籍「南京号」で、中国人86人、フィンランド人3人、ノルウェー人1人が乗っていました。

同年11月29日、これら3隻のドイツ艦船とは別に海軍に徴用された貨物船第3雲海丸（3028トン、乗組員36人）が7号岸壁に接岸し、荷役作業を行っていました。

このような状況下、8号岸壁に係留され油槽清掃中のウ号で11月30日13時40分頃に爆発事故が起こりました。

倉庫に引っ掛かったウ号破片（横浜税関所蔵写真）

(2)　事故の概要

『神奈川県警察史』（昭和47年刊）によりますと、戦時中の特異事件として「昭和17年11月30日午後1時40分ごろ、横浜港（新港埠頭）8号岸壁に繋留中のドイツ輸送船（ウ号）が突如大爆発を起こした。続いて起こった火災により、同船はまたたく間に火達磨となり、同岸壁に繋留中のドイツ仮装巡洋艦第10号「ト号」、同じく同7号岸壁の日本海軍徴用船第三雲海丸（中村汽船所有）及び同6号岸壁のドイツ汽船（ロ号）につぎつぎ引火し、瞬時にあたり一面火の海になるという大惨事となった。…この爆発は付近の倉庫、上屋、その他の建物を破壊し、現場から1000メートル以上離れた市街地の窓ガラスがその爆風のためにこわれるほどの凄まじさであった」「これらの艦船にはそれぞれ火薬類が積まれていた。このためつぎつぎに爆発を誘い、岸壁付近の上屋、倉庫、あるいは端船などに延焼し、黒煙はもうもうとして天に沖し、轟音が間断なく港内に響いた。この火災は翌12月1日未明におよび、その惨状は筆舌に尽くしがたいものがあった」と記述されています。

同県警察史の被害状況によれば、「死者及び行方不明者は102名を数え、内訳はドイツ人61名、日本人

爆発したウ号（手前）ト号（奥）（横浜税関所蔵写真）

5名、中国人36名であった。このほか物的損害としては艦船、倉庫、上屋、その他の建造物、荷物等で見積額は、3450万3516円であった」とのことです。

(3) 爆発の原因とその後

昭和17年5月のゾルゲ事件公表後のことで、謀略の可能性もあり、戦時下の同盟国の軍艦の事故として内外に及ぼす影響を考慮し、報道は機密扱いとなり事故の原因は明らかにされていません。『神奈川県警察史』によりますと、推定される事故原因は「…ドイツ輸送船（ウ号）の油槽内清掃の時に引き込んでいた電灯がスパークし、油槽内に発生していたガスに引火して爆発したのであろうという説が最も有力」との結論ですが、当時の東京税関輸入部長の目撃証言などから、「ウ号」の油槽の清掃作業中の中国人作業員の喫煙との説もあります。

犠牲者のうちドイツ海軍将兵ら61名が横浜（山手には将校、根岸には下士官兵など）外国人墓地に埋葬されました。その後、生き残ったドイツ将兵は、ドイツ及び日本の戦況悪化で帰国はままならず、将校クラスの数名は潜水艦で帰国したものの、その他の将兵は終戦まで箱根町の芦之湯温泉の旅館で暮らし、終戦後の1947（昭和22）年GHQによりドイツに送還されました。

(4) 横浜外国人墓地の歴史

横浜外国人墓地（同HP）

横浜港でのドイツ軍艦爆発事故の犠牲者も埋葬された横浜外国人墓地の歴史は、黒船4隻を従えたペリー提督が1853（嘉永6）年、久里浜に上陸して幕府に開国を迫った翌年、ペリーが開国交渉のため再来日した際に墜死した水兵の埋葬地を提供したことに始まります。

開国が進み、来日外国人の増加と共に、日本で亡くなる外国人も増え、1861（文久元）年に外国人専用の墓域を現在の元町側通用門付近に定めました。薩英戦争の原因となった1862年9月の生麦事件の犠牲者チャールズ・リチャードソンの墓などもあります。

1864（元治元）年、横浜居留地覚書き書が、幕府とアメリカ・イギリス・フランス・オランダの各国公使との間で締結され、さらに1866（慶応2）年、横浜居留地改造及び競馬場墓地等約書が締結され、ほぼ現在の墓域まで拡張されました。

維新直後の1869（明治2）年、外務省の要請により、各国領事団は1870（明治3）年、管理委員会を結成し、1900（明治33）年4月に財団法人横浜外国人墓地として法人化（2013年1月公益財団法人）され、およそ150年近く墓地の管理を続けて現在に至っており、地域社会に密着したものとなっています。

横浜外国人墓地は、現在22区5600坪（約1万8500㎡）の墓域、埋葬記録5000柱以上、墓石数は3000程度となっております。

3 横浜市民によるドイツ海軍将兵慰霊の経緯

1945（昭和20）年8月の終戦後、連合軍が根岸外国人墓地を含む横浜市中区のほとんどを接収し、朝鮮戦争の時代も米軍が使用し、長らく日本人が立ち入ることができない状態が続きました。このため横浜市民の意識から墓地の存在が忘れ去られ、雑草が生い茂り、荒れ放題となりました。

1984（昭和59）年、墓地に隣接する仲尾台中学校が立野小学校と一緒にトレーニングロードを整備した際、仲尾台中学のPTA会長だった有馬弘政氏が、「これでは葬られている人がかわいそうだ。清掃をしてきれいにしよう」と呼び掛け、生徒たちがこれに応えて、ボランティアで墓地の草刈りを始めました。1985（昭和60）年の仲尾台中学の文化祭では、戦争中の事故によるドイツ人将兵犠牲者の墓碑を含む根岸外国人墓地の概要（調査結果）が明らかにされました。

1986（昭和61）年秋からは墓前祭がスタートし、横浜市も根岸外国人墓地管理事務所を設置、1987（昭和62）年には横浜山手ライオンズクラブが20周年記念で根岸墓地入口の英文案内板を寄贈しました。

1991（平成3）年には、ドイツから1942年の爆発事故の生存

者8名（事故後箱根松坂屋旅館に滞在）が50回忌で来日し、山手外国人墓地及び根岸外国人墓地を訪れています。

1994（平成6）年には、戦争中に供出されて無くなっていた根岸外国人墓地のドイツ人犠牲者の墓石の銘板復刻の式典が、横浜ライオンズクラブの主催で、駐日ドイツ大使や駐在武官ヴェルナー大佐なども参加し、盛大に実施されました。

その後現在に至るまで、事故のあった11月末には、駐日ドイツ大使館と地元横浜市民による墓前祭が続いています。

4　外国における日本軍戦死者の慰霊

(1) 外国における日本軍戦死者の慰霊

（厚生労働省HP）

外国における日本人英霊の慰霊には、慰霊碑の建立や慰霊祭の開催などがあります。

太平洋戦争の海外戦地として最多の日本人が死亡したフィリピンでは、比島戦没者の碑が日本政府によって建てられ、約50万人の日本人戦没者を追悼し、日本大使館主催の慰霊祭が開催されています。グアム島では、遺族なども参加して慰霊祭が行われ、司令部壕の跡地で黙とうをささげたり、手を合わせたりして戦没者の死を悼んでいます。

硫黄島での慰霊については、『偕行』令和6年9・10月号河野学氏の「ねむの木の島　硫黄島」に詳述されています。

(2) 安倍元総理によるマルタの旧日本海軍戦没者墓地における慰霊

（外務省資料）

旧日本海軍戦没者墓地で献花する安倍元総理

（写真提供：内閣広報室）

マルタを訪問した安倍晋三元総理は、平成29年5月27日，旧日本海軍戦没者墓地において慰霊を行い、以下のメッセージを述べました。

「ムスカット首相との会談に先立ち、旧日本海軍戦没者墓地を訪問しました。そこで日本海軍が、1917年に日英同盟の下、マルタを拠点に地中海で活動した際の、71名の戦没者の方を慰霊いたしました。同墓地には1921年に当時皇太子だった昭和天皇も訪れ、戦没者を慰霊されています。100年前の地中海において、私たちの先人は、病院船を守り、沈没寸前の客船から多くの看護師を助けるなどして、大いなる尊敬を、英国を始めとする各国から勝ち得ました。私は、当時の先人の活躍に思いを馳せつつ、現代において、国際協調主義に基づく積極的平和主義の下、国際社会の平和と安定に一層貢献していく、その決意を新たにしました」

あとがき

根岸外国人墓地の墓前祭は、黒船来航以来地域に密着した横浜外国人墓地の長い歴史、戦時中日本軍に協力していたドイツ海軍艦艇の大規模な爆発事故であったこと、墓碑の銘板が戦時中に供出されて行方不明になったことでかえって歴史の掘り起こしにつながったこと、亡くなった方を慰霊したいという地域の子供たちや大人たちの素朴で温かい気持ち、生存者の墓参、日独の友好の歴史などが相まって、横浜市民によるドイツ海軍将兵の慰霊として存続しているものと思います。今年、戦後80年を迎え「英霊の慰霊顕彰」を各地で次世代に継承していく上で参考になればと思います。

2002年12月に公表された「追悼・平和祈念のための記念碑等施設の在り方を考える懇談会」報告書には「日本の平和の陰には数多くの尊い命があることを常に心し、日本と世界の平和の実現のためにこれを後世に継承していかなければならない」とあります。同懇談会委員の一人である学習院大学法学部の坂本多加雄教授の言葉「**国の危機に殉じた人々を追悼し、顕彰することは、世界各国の国民に共通する普遍的な徳であり意志である**」で本稿を締めたいと思います。

※参考文献：石川美邦著『横浜港ドイツ軍艦燃ゆ』木馬書籍